

<原著>

## オルテガにおける観念と信念—想像力と現実—

長谷川 高生

### Ideas and Beliefs in Ortega y Gasset - Imagination and Reality -

Kosei HASEGAWA

In this paper I try to investigate Ideas and Beliefs in the thought of a spanish philosopher, José Ortega y Gasset. Ideas are the schematic images of things, characterized by conscious and revocable contents, personal and clear consciousness, individual and socially invalid creations, and so on; Beliefs arise as products of drawing within oneself, are collective, inherited, vital, and even subconscious realities, and form the very fabric of society. In the socialized and exteriorized life man is to be within himself through thinking ideas, and again challenges outer worlds with his own new programs of life.

**Key words** : ideas, beliefs, realities, doubts, imagination, interior and exterior worlds

観念、信念、現実、懷疑、想像力、内部・外部世界

#### 一 はじめに

オルテガ思想における「観念と信念」の命題は理性と生理性、大衆と少数者などの命題と同じく、オルテガが提示した命題として世界の研究者の間でかなり有名なテーマである。彼はこの命題を 1934 年脱稿、1940 年刊行の彼の論文「観念と信念」で集中的に論じている。以下、この論稿に焦点を当てて、観念と信念、観念と真理、観念と知性、信念と懷疑、外部世界と内部世界、想像力と生の経験などについて考察を深めてみよう。

#### 二 オルテガの「観念と信念」

##### (1) 信念の発見

まずオルテガは、「われわれがある一人の

人間を理解しようとするとき」、つまり「ある一人の人間の生を理解したいと思うときには」、「まず第一にその人の考え方がいかなるものであるかを知ろうと努める」と指摘し、さらに「ある一人の人間—もしくはある一つの時代—の思想を解明しようとする際に、問われているものがじゅうぶんに明確でないと、その人間やその時代の姿を明らかにすることができない」と言う。それゆえ、オルテガは「ある人の持つ思想」について探究していく。そしてそうした思想が一般的な思考や科学的真理など「実にさまざまな段階の真理」に分けられることを見出す。オルテガによれば、これらの観念は「一般的な思考であれ厳密な『科学的理論』であれ、それらは常に考えだされたもの、つまり、彼が自分で考えたにしろ他人から摂取したにしろ、とにかく人

間の内部から現われてきたもの」である。それゆえ彼は、「そのような観念を思いついたり採り入れたりする以前から、すでに人間が存在していた」のであり、「観念は、観念に先だって存在していた生の内部から生まれる」と指摘する。

ところで、「ある種の基礎的な信念から成り立っていないような、言ってみればそのような信念の上に立っていないような人間の生はない」と考えるオルテガによれば、「生きるとは、なんらかのものと一世界と自分自身とに一かかわりを持つこと」であるが、「人間が会おうこの世界とかこの『自分自身』とかは、そもそものはじめから世界と自分自身についての一種の解釈、つまり『観念』といった形で現われる」のである<sup>1)</sup>。ここから、オルテガは「別の層の観念」を発見している。彼によれば、「この層の観念は、人間が思いついたり採り入れたりする」「観念」とはきわめて異なっている。これがオルテガの言う「信念」なのだが、これについて以下の諸点を指摘している。彼の見るところ、①「このような基礎的な『観念』は、しかじかの日時にわれわれの生の内部から現われ出たものでも、また、われわれがなにか特別な思考活動

によってそのような観念に達するものでもない」。②この信念は「われわれが所有するところの思想でも着想でもなく、また、その論理的完璧さゆえに最高の等級に属し、われわれが理論と呼んでいるものではない。以上のようなものとはまったく逆のもの」である。

③「真に『信念』となっているそうした観念は、われわれの生の容器にあたる部分を構成しているので、生の中にあっては、独自の内容といったようなものは持っていない」。④信念は「われわれが所有するところの観念ではなく、われわれの存在そのものである観念」である。さらに言えば、⑤「それらがきわめて根本的な信念であるというまさにそのことから、われわれには現実そのもの—われわれの世界とわれわれの存在—と混同されている」のである。したがって信念は、「われわれが思いつかなかったこともじゅうぶんありえたような種類の観念とか、思考に備わる性格を欠いている」のである<sup>2)</sup>。

## (2) 観念と信念との対照

以上のごとき「観念と信念」の命題、とくに両者の差異について要約したものに、ラサーガ・メディーナの対照表がある。それには観念と信念のそれぞれの性質について、以

### <信念 (Creencias) / 観念 (Ideas) の対照表>

1 依存する (Contar con)	/ 気づく / (Reparar en)
2 現実という性格 (Carácter de realidad)	/ 取消可能な性格：空想 / (Carácter revocable: fantasías)
3 人間的生という大陸 (Continente de la vida humana)	/ 私的な意識の内容 / (Contenidos del yo-conciencia)
4 潜在的あるいは無意識的なもの (Latentes (o inconscientes))	/ 意識に明瞭なもの / (Patentes a la conciencia)
5 社会的有効性を保持 (Tienen vigencia social)	/ 有効性無し / (Sin vigencia)
6 集団的であること (Son colectivas)	/ 個人的であること / (Son individuales)
7 相続されたもの (Son heredadas)	/ 創造されたもの / (Son creadas)

下の7点が双方を対照させつつ示されている<sup>3)</sup>。

このメディーナの観念と信念の対照表は確かに、うまく双方の特徴を捉えているが、筆者の見るところ、オルテガは観念と信念それぞれの性格についてもっと深く探究しているようである。以下、それらの諸点について考察してみよう。

まずオルテガは「この二種類の観念がわれわれの生の中で果たしている異なる働き、すなわち次のような「機能面での顕著な違い」に注目している。①「想念的観念」―「この中には厳密をきわめた科学的真理も含まれている」―については、「われわれはそれらを生み出し、それらを支持し、それについて論じ、それを宣伝し、そのために戦い、そのために死ぬことさえありうると言える」。②「われわれに不可能なことといえは……それを生の糧として生きていくことぐらい」である。③それらは「われわれの所産であり、したがって最初からすでにわれわれの生を前提にしている」のである。これに対して、①このわれわれの生そのものがそれに立脚している「信念的観念」は、「われわれが生み出すものではなく、たいていの場合は、われわれ自身によっても明確な形で意識されていない」。「われわれはそれを論じたり、宣伝したり、支持したりすることもない」。②「信念に対しては、われわれは、なんの働きかけもせず、ただその中に身を置くだけ」である。それゆえ、③「人間は信念のうちに身を置き、想念を所有したり支持したりしている」が、この信念こそが「われわれを所有し、われわれを支えている」のである。④したがって、一方には「われわれが出会うところの観念」があり、他方には、「われわれがその中に身を置いているところの観念」があり、この後者の観念は、「われわれが思考活動を始める以前からすでに存

在している」ものなのである<sup>4)</sup>。

### (3) 主知主義批判

オルテガの見るところこれまでの哲学は、「信念」と「想念」を「ともに同じ名称『観念』」で呼び、本来は「別々の思考法と名称を要する根本的に異質な二つの問題を、混同して」きたのである。オルテガの生の哲学の観点からすれば、「他のすべての視点が生の中で与えられ、すべての視点は生の視点の特殊化したものに過ぎない」から、「個別的、相対的でない唯一の視点は『生』の視点」である。この視点から見れば、①「生的現象としては、信念と想念はまったく似るところがない」。つまり、「われわれの存在構造の中での信念の働きは、思念のそれとは全く異なっており、ある面ではそれと対立している」のである<sup>5)</sup>。②信念は観念とは「逆の性格を持って」われわれの前に現われるのである。われわれは「悟性の働きを通して信念に達するのではない」。われわれが「なにかについて考えはじめたときには、信念はすでにわれわれの深部で働いている」のである。③それゆえ、われわれは「一般に信念を明確な形でとらえるといったことはなく」、通常は、われわれが「われわれにとって現実そのものであるものに対してなすように、漠然とそれを意識するだけで満足している」。④真の信念は、「いまも意識されていなければ後から意識されることもない」。「われわれと信念とは、きわめて緊密に結びついて」おり、「われわれは間断なく常時、信念に依存している」のである。こうした信念の性格とは反対に、①「思弁は、たとえそれが最も真理性に富むものであっても思考されている間しか存在」せず、「思弁が明確な形で意識されている必要がある」のである。②「われわれの思考の対象となるすべてのもの」は、「まさにそういうものであるがゆえに、ipso facto 問題をはらんだ現実」

であり、「真実の信念と比較された場合には、われわれの生の中で二次的な位置」しか占め得ないのである。かくしてオルテガは、以上のように「『ものを考えること』と『ものに依存すること』とを比較対照する試みは、生の構造に照明をあてる上できわめて重要なこと」だと考えているのである<sup>6)</sup>。

こうした観念と信念を対置して考える観点からオルテガは「過去の哲学全体にわたってほとんど休むことなく暴君ぶりを発揮してきた主知主義」を批判して、第一に、主知主義が「『ものを考えること』と『ものに依存すること』の意味が明らかにされるのを妨げてきた」上に、「両者がそれぞれに持っている価値を逆転させてしまった」と非難するのである<sup>7)</sup>。第二に、彼によれば、「主知主義には、われわれの生の中で最も影響力の強いものは最も意識的なものであると考える傾向」があったのである。しかし、「真実」は「その反対」であり、「われわれの行動に最大の影響を及ぼすもの」は、「われわれの知的活動の底に潜在するもののうち」に、つまり、「われわれが無意識的に依存しており、しかもまったく依存しきっている」ために、「そのことを考えることもないいっさいのもののうち」に横たわっているのである。第三に、オルテガが見るところ、「主知主義は人間が無意識のうちに依存しているものの最深部まで、すなわち、程度の差はあれ明確に表明されていない信念の層まで掘り下げようとはせずに、人間や歴史の生を、それらが持つ観念、つまり特殊個別的思想の総体から解明しよう」としたのである。しかし、彼の洞察によれば、「真に歴史を築きあげ、生をその根底から解明する」ためには、「信念の層まで掘り下げること、つまり人間が無意識的に依存しているものの目録を作製すること」が最も肝要とされるのである<sup>8)</sup>。

こうした主知主義への批判については、オルテガの最後の著作と言われる『個人と社会』でも近代の理性（合理）主義批判に関連して言及されている。オルテガが「知性の神格化」と呼ぶ主知主義は、「最初は理性 *raison*、次には啓蒙精神 *ilustración*、最後に文化 *cultura* という名の下に、名辞のもっとも根本的なごまかし、および知性についてのもっとも無分別な神格化」を遂行し、「文化や思想」をして「逃亡中の神の空席を埋め」させたのである。オルテガのすべての仕事は、彼が「『慢心した文化』と名づけてきたところのこうした態度に対する戦い」であったのである。彼の見るところ、主知主義の下では「人間の生は文化に奉仕するものでなければならなかった」のであり、そうしてこそ初めて「人間の生は価値ある実体に満たされる」というのである。しかし「この説に従うならば、人間の生、すなわちわれわれの純粋な存在は、それ自体つまらぬ無価値なもの」となってしまう、とオルテガは訴えるのである<sup>9)</sup>。

主知主義による「生と文化、行動と観想とのあいだの真の関係」のこの「逆転」は、「ここ百年のあいだに一だからきわめて最近まで一観念、書物、そして芸術作品の過剰生産」を、つまり「文化的インフレーション」を誘発し、「ビザンチン様式の現代版『文化の資本主義』と名づけられるようなもの」をも生み出してしまったのである。「現代人が必要とし摂取することのできる必要観念に応じた生産」の代わりに、「生産のための生産」が行なわれ、「市場には商品が氾濫して危機が到来した」のである。オルテガの見るところ、「文化の慢心を意味するこうした主知主義的逸脱のもっとも重大な点」は「人間に対して、文化、自己沈潜、そして思想というもの」を、「恵みか宝石であるか」のように、つまり「人間が自分の生につけ加えるべきなにか」とし

て、したがって、「まるで文化や思考なしの生があるか」のように、そして「自己沈潜なしに生きることが可能であるか」のように、「自己の生の外にまずさしあたり見いだされるもの」として提示するところにある。オルテガからすれば、これは「まるで人間は一ちょうど宝石店のウインドーの前に立たされたかのように一文化を手に入れるか、それともそれなしですますか、その選択を求められているようなもの」である。「人間はこうしたディレンマに直面して迷うことなく」、「後者のほうをとことんまで試みよう」と決心していることは明らかであり、「現に彼らはあらゆる自己沈潜を避けようとし、完全な自己疎外に身をまかせようとしている」のである。それゆえオルテガは、現代においては「ヨーロッパには自己疎外しかない」と診断するのである<sup>10)</sup>。

### 三 観念・信念と真理

かくしてオルテガは、「ある人間やある時代の思想がいかなるものであるかを解明しようとするとき」、われわれは「根本的に異なる二つの事柄」、つまり「信念」と「想念もしくは『思考』」、すなわち「観念」とを区別すべきだと言うのである。オルテガは「信念」について再び次の諸点を考えている。①「信念」は「われわれの生の基盤を、つまり、その上で人間の生が展開される大地」を作りあげている。なぜかと言えば、信念は「われわれにとって現実そのものであるものを開示してくれる」からである。②われわれの行為は「知的な行為を含めて、すべてわれわれの真正なる信念の体系がいかなるものであるか」にかかっている。われわれは「そのような信念のうちに『生き、行動し、存在している』」。その結果、われわれは、「そのような信念について明白な意識を持たず、信念のことを考

えないのが普通」である。③ところがそのような信念は、「われわれが明晰な意識を持って行なったり考えたりするあらゆる行為のうちに含まれていて、潜在的に作用」している。すなわち、「なにかを本気で信じているときには、われわれはそれについて『観念』を持たず、ただ『無意識のうちで依存しきっている』のである」。それとは逆に、①「観念」、つまり「われわれが事物に関して抱く想念」は、「自分で考えたものであれ他人から借り受けたものであれ、われわれの生の中では現実の力を持たない」。②観念は「人間の生の中では、ほかでもなくわれわれの考えたものとして、しかもそのようなものとしてのみ作用している」のである。③このことは、「われわれの『知的生』全体が、現実の生もしくは真正なる生に従属し、またそのような真の生の中では仮定的、想像的次元しか表わしていないこと」を意味している。

以上のごとく生の基盤・大地たる「信念」と、現実の真正なる生に従属する「観念」とを区別するとき、われわれが通常考える「真理」、すなわち「観念や思弁の真理性」とは何を意味するのであろうか。以下、オルテガの見解をまとめてみよう。まず第一に、オルテガの洞察によれば、「ある一つの観念が、ほんとうだ」と思われる、すなわち「真理」であるとされるのは、それが「現実に関するわれわれのイデーに適合するとき」である。しかし、「現実に関するわれわれの観念は、われわれの現実そのものでない」。したがってオルテガは、「観念の真偽の問題は、観念が築いている想像上の世界内の『内政問題』である」と言うのである。さらに第二に、オルテガの見るところ、「われわれの現実は、われわれが生きて行く際に無意識のうちに依存しているところのすべてのものから成り立っている」。しかし、われわれは、「無意識のうち

で自分自身が実際に依存している大部分のものについてはいささかの観念」も持っていない。それゆえ、「われわれにとって観念は観念であるかぎりにおいて現実なのでなく」、反対に、「それがわれわれにとってたんに観念であるだけでなく、知の下部構造をなす信念である程度に従って現実となる」とオルテガは主張するのである<sup>11)</sup>。第三に、「知性というものは疑わしい事柄の上にだけ作用する」ゆえに、「観念の真理性は、その含む問題性に立脚」し、「その真理性は、この問題点に対してわれわれが試みる論証から成っている」。さらに第四に「観念は批判を必要」とし、「ある一つの観念は別の観念に立脚することによって自らを支え、自立」し、そして「この別の観念もまたさらに別の観念に立脚」しており、こうして「一つの全体ないしは体系を作りあげている」。それゆえ第五に、「観念は、現実の世界とは別の世界を、つまり人間がその創造者であり責任者であることを自覚している、観念だけから成る世界を構成」しているのである。したがって第六に、「最もゆるぎない観念の確固さといえども、いかに多く他の観念と整合しうるかという、その整合性に還元できる」のである。「観念を硬貨に、現実を試金石になぞらえ、観念を直接現実にあたきつけることによってその真理性を試験することはできない」のである。第七に、「最高の真理とは明証的なもののそれ」であるが、「明証性そのものの本質は、たんなる思弁とか、観念とか、知的結合作用にはかならない」のである<sup>12)</sup>。

さらにオルテガは「厳密をきわめた科学的思考」や「明証性にもとづく思考」でも「ほんとうの意味での信念」ではないと主張するのである。彼に言わせれば、「明証的なものは、それがいかに明証的であろうとも、われわれにとって現実ではなく、またわれわれ

はそれを信じていない」のである。彼の見るところ、人間というものは、「ひとたびある主題について思索しはじめると、われわれはそれ以後、明証的であると思える想念と異なっていたり対立したりする想念の存在を、自己の内部に許さない」けれども、「知的結合作用」が「われわれがなにかを思索しはじめていることと、われわれが思索したいと思いつことの二つをその条件としている」ことからして、「明証的想念」を「われわれの思索の対象とするか否かの決定はわれわれの手中にあるわけだから、あれほど不可避と思えた知的結合もわれわれの意志に依存するものとなり、まさにこのことから ipso facto そのような真理はわれわれにとって現実ではなくなる」のである。オルテガに言わせれば、「現実」とは「われわれ人間の好むと好まざるとにかかわらず、まさにわれわれが無意識のうちで依存しているところのもの」であり、「反意志的なもの」である。「現実」とは、「われわれが所有しているものではなく、むしろわれわれが外部世界の中で出会うところのもの」である<sup>13)</sup>。しかもオルテガは、「われわれとわれわれの観念の間には常に埋めがたい距離」、つまり「現実的なものから想像的のものに至る間の距離」の存在を指摘し、逆に、「われわれとわれわれの信念とはわちがたく結びあわせられ」、それゆえ、「信念はわれわれの存在そのものである」と言う。彼は「観念に対するときのわれわれは、われわれ自身と観念を隔てるなんらかの形の中立地帯を間に設け」、「生に及ぼす観念の影響がいかに大きくとも、われわれはいつでもその影響を遮り、人間と思弁の結びつきを断つことができる」と言う<sup>14)</sup>。

#### 四 観念と知性・理性

ではオルテガは観念と、これがそこから出

てくる知性・理性との関係についてはいかに考えているのであろうか。理性については、彼は「現代の人間が有している信念の中では『理性』に対する、つまり知性に対する信頼が、最も重要なものの一つである」と指摘し、さらに「理性への信頼が近年被った修正」がいかなるものであれ、「理性への信頼の本質的部分が生き続けていること、つまり人間が知性を実際に存在し、人間の生を構成している諸現実の一つと考え、またそれが持つ現実的な力を信頼しつづけている」と主張する。しかし、オルテガは「知性そのものへの信頼とこの知性が生みだした一定の観念への信頼とは別のものである」と言う。オルテガの考察によれば、人間は、知性と観念のうち「いずれの観念もそれを直接信じているわけでない」。したがってここではオルテガは、信念の層、知性・理性の層、観念の層の三つの層を以下のごとく識別しているのである。まず信念の層については、「われわれの信念は実在するものとしての知性一般に直接かかわっている」が、「知性をもとにして作りあげられた観念ではない」。次に知性・理性の層に関しては、「知性への信頼に備わる明確さ」は「ほとんど大部分の人が知性に関して持っている観念の不明確さ」と比較して歴然たるものがある。すなわち、「理性に対する信仰は、この信仰に関する理論の最も激しい変化や、理性とは何かという問題をめぐる理論の大きな変化さえも平然と耐えてきている」。つまり、「理性をめぐる理論の変化は理性への信仰の形に影響してきた」が、「この信仰自体はその影響にもかかわらず、なんらかの形で生き続けている」とオルテガは指摘している<sup>15)</sup>。そして最後に、観念の層についてはオルテガは、「思考や観想がわれわれにもたらしめるのは、われわれにとっては現実ではなくて、まさしく観念であり、しかもただそ

れだけのもの」であると言うのである<sup>16)</sup>。

そして現代の知性の置かれた状況についてオルテガが洞察するところによれば、「この数世紀の間は知性、つまり一般に『理性』と呼ばれていたもの」が「われわれのいっさいの疑問や問題点をそこに持ち込む」「最高のよりどころとなっていた」。しかし、「今日ではそうした理性に対する信仰が揺らぎ衰えているが、理性は人間の生の残りの部分全体を支えているので、その結果われわれは生きていくことも共存することもできなくなっている」。かくして現在、理性に代わることのできる「別のいかなる信仰も、いまだ地平線上に姿を現わしていない」し、「われわれの存在が示している根なし草の相貌や、われわれは底なしの深淵にまっさかさまに落ち込みつつあり、いくらかがいてみてもしがみつくものが何もないのだという印象」が濃厚であり明白なのである。結局オルテガの見るところ、「なるほど理性への信仰は衰退しているが、しかしまだ死滅はしていない」ということなのである<sup>17)</sup>。

以上のごとく現実、信念、知性・理性、観念について考察をめぐらせたあとオルテガは、「われわれにとって観念とは何か、生におけるその本源的役割は何か、といったことをほんとうに理解する」ためには、「いままでになされてきた以上に、科学を詩に近づける勇気を持つ必要がある」と主張する。彼によれば、「科学は現実よりも詩のほうにずっと近く位置し、われわれの生の機構の中でのその働きは、芸術のそれに酷似している」。たしかに「小説と比較した場合」には「科学は現実そのものと見える」が、「真の現実と比較すると、科学には小説的、空想的な面や、知的構築物、想像的建造物の性格が備わっている」とオルテガは言明するのである<sup>18)</sup>。

## 五 信念と懷疑

ところでオルテガによれば、「人間というのは、根は信じやすい質（たち）の存在である」。すなわち、「人間の生の根底の層、つまりほかの層を支え、それらを背負っている層は、信念から形成されている」のである。「信念とは、われわれがその上で生の活動を展開している強固な地盤」である。さらに言えば、オルテガが「われわれの有している最も基本的な信念の一つ」として挙げ、「またこの信念がなければ、われわれはきっと生きてゆけない」ほどの「信念」とは、「ときに地殻のところどころで地震が起こりはするが、地球そのものは強固だという信念」である<sup>19)</sup>。

しかしオルテガの見るところ、「信念から成るこの根底の領域のあちこちには、まるで落とし穴のように懷疑の大きな穴が口を開けている」のである。彼は「懷疑」について次のような特徴を指摘している。①まず「たんなる方法論上の懷疑とか知的な懷疑ではない、真の懷疑というものは「信念の一形態」であり、「生の構造の中では信念と同じ層に属し」、「信念の場合と同様、人間は懷疑のうちにも身を置いている」のである。②「ただ違うところは、この場合の身を置くが戦慄的性格を帯びている」ことである。「懷疑のうちにも身を置いている人間」は、「いわば深淵のうちに身を置いているようなもので、常に落下しつつあると感じる」。③だから懷疑とは「安定性の否定」なのである。「懷疑に陥ると、突然床の下で強固な地盤が崩れ、大地がほんとうに深淵に落ち込んでいくよう」に思え、われわれは「体を支えることもできず、よりつくところもなく、生命を守るためになにもなしえない」と感じる。「懷疑を抱くこと」は、「生の中に死を感じたり」、「自分自身の消滅に立ち会ったり」するようなもので

ある。④しかしながら「懷疑」は「人間がその中に身を置くもの」、つまり、「われわれが自分で作ったり置いたりできないもの」だという「信念の性格を保持」している。⑤「懷疑」は「われわれが考えたり、認めたり、批判したり、表明したりする、あるいはしなかったりすることの許される観念」とちがって、「絶対にわれわれの存在そのもの」である。⑥「人間の生の中で懷疑は信念とまったく同じ働きをしており、それと同じ地層に属している」のである。⑦それゆえ「信念と懷疑の違い」は「信という点」にあるのではなく、「信じられているものの中にある」のである。懷疑は「信じるに対する『信じない』」でもなければ、また、『「……であると信じる」』に対する『「……でないと信じる」』でもない。⑧懷疑は「われわれを疑わしきものの前に、つまり信念にもとづくものに劣らぬくらい現実である『一つの現実』の前に投げ出す」。しかしながら「この現実はやや曖昧模糊として安定せず」、「それに直面したわれわれは何に頼り、何をなせばよいのか、わからなくなる」。要するに懷疑とは、「不安定そのもののうちに身を置いた状態のこと」であり、それは「地震の中の生」、「永続的で、決定的な地震の中に置かれた生」なのである<sup>20)</sup>。

ここでオルテガは「懷疑に関した民衆の言葉」に目を向けている。すなわち、「いつでも思想家というものは闘牛士よろしく根源的な現実を跳び越えてしまい、それに背を向けているのである。反対に思想家でない者は、肝心のところでは彼らよりもずっと注意深く、自己の存在に鋭い視線を注ぎ、そこにかいまみたものの結晶物を民衆の言葉の中に残してきた」のである。オルテガによれば、「われわれは、言語自体がすでに思想であり、学説であることをあまりにも忘れている」のである。それゆえ、彼は次のように、民衆の「そ



の言いまわしに秘められている機知と鋭い現実把握」に注目するのである。まず、民衆のそうした言いまわしは「人間が懷疑のうちにあり、脆く崩れやすい地盤にめり込んでいくような感じを受ける」と語っている。つまり「疑わしいものとは、人間がその中で身を持ちこたえることができず、沈みこんでしまうような液体状の現実」なのである。オルテガによれば、「ここから例の『懷疑の海の中にいる』という表現が生まれた」のである。これは「信念の基盤である強固な大地と好対照 *contraposto*」をなすものである。次に民衆の言葉は同じ譬えを引きつづいて用いながら、「懷疑が動揺であり、波の運動である」と語っている。たしかに「懷疑の世界の情景は海のそれ」であり、「それを眺める人間に難破を思い起こさせる」。また「心の動揺としてとらえられた懷疑は、それがいかに信念と似ているか」を納得させてくれる。「懷疑は信念にきわめて近く、信念とは双子のような間柄」である。さらに「人間が懷疑を抱くのは、対立する二つの信念の中間にあるから」であって、「この二つの信念は衝突し、われわれを互いに投げあい、われわれを宙に浮いた状態に置く」。「数字の二 *dos* が懷疑 *duda* のはじめの二文字 *du-* の中に含まれている」ことは明白にみてとれる、とオルテガは言っている<sup>21)</sup>。

## 六 観念が働く場所

さてオルテガによれば、人間は、こうした「懷疑」、「信念の強固な地盤に口を開けている深淵に落ち込んだと感じる」とき、「力いっぱい抵抗を試みる」。つまり、「懷疑から脱出しよう」と努める。オルテガが洞察するところ、われわれが懷疑の状況にあるとき、「信念に特徴的なことは、それに直面したわれわれに何をなすべきかがわからないこと」であ

る。すなわち、「われわれに起こっていることがほかでもなく、世界—その一部という意味にとっていただきたい—がわれわれに両義的なものとして現われるので、どうしたらよいかわからないということ」なのであり、「世界に対してなすべきことがなにもない」のである。しかし、このような状況にあるときにこそ「人間は一風変わった営為—ほとんどそうは思えないが—を、つまり思考という営為をはじめる」のである。ところでオルテガによれば「思考という営為は、われわれ人間が事物に対してなしうる最小限のこと」である。そのためには、「われわれが事物にさわってみる必要もないし、身体を動かして必要すらない」。「身のまわりの事物がいつか崩れ去ったときでさえ、われわれにはこの崩れ去った事物について考えるという可能が残されている」。したがって、「懷疑に陥ったときには、人間はまるで救命具にでも飛びつくかのように知性によりどこをを求める」のである<sup>22)</sup>。

さてオルテガによれば、「信念の中に見当たる空洞」は、「観念が生の営みに介入してくる場所」である。「観念」は「さまざまな世界を空想したり想像したりすることによって」、「不安定かつ両義的な疑念の世界を、両義性の消え去った世界で置き換えようとする」。「観念とは想像力」なのである。人間は「疑わしいものや問題のあるいっさいのことを独力で解決しなければなら」ず、「さまざまな世界像とそれら諸世界の中での予想しうる行動をあれこれ思い描いてみる」のである。そのような「数多くの世界像」のうちで「観念的にはあるが、いっそう確実性がある」ものは「真理と呼ばれる」が、「真なるものは、たとえそれが科学的に真なるものであっても、実は空想的なものの特殊な場合にほかならない」のである。オルテガの洞察によれ

ば、「人間には、あらかじめ決定された世界は一つも与えられて」おらず、「与えられているのは、生の苦しみと歓び」だけなのである。人間は「苦しみと歓びに導びかれて、あるべき世界像を作りだしていかなければならない」のである。「われわれが所有している世界像の大部分は先祖から受け継いだもの」だが、それらは「人間の生の営みの中で確固たる信念の体系として作用している」のである<sup>23)</sup>。

ところでオルテガはこの「観念が何であるか」、また「知性の役割とか位置とか」について明確に把握しておこうとする。というのは、「今日のあらゆる苦悩と悲慘の根源をなすと思われるもの、つまり数世紀間にわたって豊饒な知的創造が続き、それにいっさいの希望を託したにもかかわらず、いまや人間は観念に対してどう対処すべきかがわからなくなりはじめている」からである<sup>24)</sup>。そこでオルテガは今一度、「信念と観念もしくは想念との間」に「設定した区別」を以下のように確認するのである。まず、①信念とは「たとえそのことを考えていなくとも、われわれが無意識のうちで絶対的に依存しているようないっさいのもの」である。したがって、②「もしわれわれが信念の存在を確信し、それはわれわれの考えているとおりのものだ」と確信しきっていれば、われわれはことさら信念を問題にすることなく、無意識のうちにそれを考慮に入れて行動する」ことになる。たとえば、「道を歩くとき、われわれは建物を突き抜けて進んでいこうとはしない」。「われわれは『壁は突き抜けられないものだ』という明白な観念が脳裡に浮かぶのを待つまでもなく、自然に建物と衝突するのを避ける」。それゆえ、③「人間の生はあらゆる瞬間において、これに類した膨大な数の信念に支えられている」のである。他方、①観念とは「われわれが確

固とした信念を見いだせないような事物や状況」において働くのである。つまり、事物や状況が「実在するのかしないのか、また、それがいかなる性質のものかといったことがつかめない」場合に、「そうしたものに関してなんらかの観念、つまり見解を自分で作りあげるより仕方がない」。したがって、②観念とは「ほかでもなく、そのような事物や状況を信じていないがために、その補いとしてわれわれが意識的に考え、作りだした『もの』」なのである<sup>25)</sup>。そして、③「われわれにとって充実した真の現実とは、われわれが信じているところのものにはほかならない」のであるのに対して、「観念は懷疑から、つまり信念の中の空白や空洞から生まれる」のであり、「われわれが考えだすものである観念は、充実した真の現実ではない」のである。それゆえ、④オルテガはここに「観念に備わる補足的性格」を見出し、「観念というものは信念が崩れたか、あるいは弱まったところで働いている」と言うのである。以上の考察からして、オルテガは、「われわれが一面では信念—その起源がどこであろうと—から、他面では観念から構成されている」という「疑いえない事実」から出発した上で、「信念はわれわれの現実の世界を構成しているが、観念は……それはわれわれにはよくわからない」、「知性の役割とか位置とかはいかなるものであるべきなのか」、「実は、それがわからない」という状況にわれわれ現代人は置かれていると言うのである<sup>26)</sup>。

## 七 原初の現実としての地球と内部世界

そこでオルテガは観念の問題から翻って真の現実を捉えるために、「地球」について洞察する。われわれ現代人は「地球という言葉で、実際の地球の構造と大きさを持つ天体、つまり信頼するにたる規則性と安全性でもっ

て太陽の周囲を回る、ひと塊りの宇宙の物質と解する」が、「紀元前六世紀の人間」にとっては、「地球は女神、母なる女神、つまりデメテル Demeter」であり、「地球は一つの物質でなく、意志と気まぐれを持つ神的な力」だったのである。いずれの場合も当該の人間たちが「固く信じている信念」なので、その人間たちにとっては「現実」である。しかし真実は、「原初の地球の実体」が「二つの概念のどちらでもなく、すなわち『天体としての地球』も『女神としての地球』も現実そのものなのではなく、それらが二つの観念である」ということである。すなわち「このような二つの地球観は、限られた人びとが大きな努力の末にある日思いついた現実についての観念であり、しかもそれらは正しいこともある」ということなのである。以上の考察からしてオルテガは、「われわれが地球の実体であるとして抱いている表象は、地球それ自体から直接引き出されるものではなく」、「ある一人の人間に、彼に先だつ多くの人間に負うており」、しかも「その真理性」は「疑問の余地なき真理」ではなく、「多くの難解な考察」にもとづいた「問題をはらんだ真理」であると指摘するのである<sup>27)</sup>。かくしてオルテガによれば、「あらゆる解釈に先だつ地球は、『もの』でさえない。『もの』というのは「すでに一つの存在様式、つまり、原初の現実を自らに説明するために人間の知性が考えだした、ある『もの』（たとえば、『幻』に対立させて）の一つのあり方」だからである<sup>28)</sup>。したがってオルテガの洞察によれば、「地球の真正なる現実とは、形も存在様式も持たず、まったくの謎」である。「原初の何もまとわない構成物としての地球」は、「この瞬間にはわれわれを支えているが、しかし次の瞬間には足元から崩れないとの保証をいささかも与えることのない大地」であ

り、「われわれが危険から逃れる便宜を与えてくれるが、しかしそれと同時に『距離』という形で、われわれを愛する女や子供たちから引き離すもの」でもある。それゆえ、「人間が地球に関して作りあげていった種々の観念をはぎとられた地球自体は、いかなる『もの』でもなく、われわれの生にとって漠然と便宜であるものと困難であるものの総体」である。「この意味において」オルテガは、「原初の真正なる現実とはそれ自体としては形を持たない」と言っているのである。それゆえ「そのような現実を『世界』と呼ぶことはできない」し、そうした現実とは「われわれの実存に対して投げかけられている謎」である、と彼は言うのである。彼によれば、「生きていくということは、不可解なものの中に絶対的に身を沈めている」ことなのである<sup>29)</sup>。

こうした地球の真の現実への考察からオルテガは、「人間はこの原初の知以前の謎に対して、知的器官一特に想像力を用いることによって働きかけ」、「数学的世界、物理的世界、詩的世界を作りあげる」と主張する。彼によれば、「それらの諸世界は形を持ち、一つの面、つまり一つの平面をなして」おり、「それらは実際に『世界』」なのであり、「真正なる現実の謎と相対している」「このような想像上の諸世界」は「この真正なる現実と最大限の調和をみるときに受け入れられる」が、「けっして現実そのものと合体するものでない」。「完全な一致がみられる部分も、一致が完全に行なわれない残りの部分から切り離せないため」、「結局のところそのような諸世界は、全体としてみれば、それらの真の姿である想像上の世界として、つまり、われわれの知性の力によってのみ存在する世界、要するに、『内部』世界として在る」ことになる。かくして、「われわれはそうした世界を『われわれの』世界と呼ぶことができ」、「数学者

が数学者であるかぎり、また物理学者が物理学者であるかぎりそれぞれの世界を持っているように、われわれの一人ひとり自分の世界を持っている」のであるとオルテガは言うのである<sup>30)</sup>。

しかも、人間は「謎に満ちた、したがって戦慄的な真正なる現実—ところで、知性にとってのみ戦慄的である問題、つまり非現実的な問題はけっして戦慄的ではないが、まさに現実そのものとしては謎であるところの現実、戦慄そのものである—に直面」したとき、「自己の内部に、現実とは別に想像の世界を作りあげる」のである。すなわち「意識の働き」のうえで、「人間は一時的に現実から退き、自己の内部の世界に閉じこもる」ということである。動物は「内面、つまり内部世界を持た」ず、「想像力を備えて」おらず、「つねに現象するがままの世界に注意を払わねばならず、したがって『自己の外に』出ていなければならない」のに対して、人間は「一時的に現実を脱け出して観念のうちに没入する」「内面」、すなわち「想像力の世界、つまり観念の世界」を持ち、「自己沈潜」できるのである。そして人間は「この自己沈潜からすぐに脱け出て現実に戻る」とき、「ちょうど光学機器を使っているみたいに、自己の内部世界や自己の諸観念を通して現実を眺めるわけで、そうした観念のうちには信念にまで固まっているものもある」とオルテガは指摘している。したがってオルテガによれば、人間は「謎に満ちた現実のうちに身を置くと同時に、自分の考えだした観念が構成する明晰な世界のうちにも住んで、二面的な生を営んでいる」ということなのである。そしてこの場合の「観念の中での生は『想像上のもの』であるが、しかし想像上の生を営むことは、それはそれで絶対的な現実属している」ということでもあるのである<sup>31)</sup>。

オルテガはこうした「自己沈潜」する人間状況が原初の謎めいた現実のときだけでなく、文化が爛熟した社会においても起こりうることを、「煩瑣化し、爛熟した文化のなかに『教養人』が出現する地点」として、『危機の本質』で以下のごとく見事に描出している。彼によれば、「教養人が爛熟した文化のなかにいる状況は、文化の創造者が自己の自発的な生のなかにいる状況と似かよって」おり、「創造者が宇宙的周囲世界に窒息したように、教養人も文化的周囲世界に窒息する」。そして、「状況の類似性は、かれをおなじような解放反応へおもむかせる」のである。すなわち、「原始林のなかにおかれた人間は、ひとつの文化を創造することによって自分を取りまく諸問題に反応する」。つまり「かれは、森から身を引き、自己のなかへ沈潜しようとする」。「自己沈潜のない創造はない」のである。オルテガの考察によれば、「虚偽となった文化を食って生きているあまりに『開化した』、あまりに『社会化した』人間が絶対に必要とするものは、ひとつの……べつな文化、すなわち、真正の文化」である。しかし、「真正な文化は、自己自身の自我の純正な基盤からのみうまれるもの」である。だから、「自我は、あらためて自己自身と接触しなくてはならない」。ところが、「かれの教養された自我が、継承された、すでに硬化した、もはや説得力をもたない文化が、それをさまたげる」。「いとも簡単にみえること（自己自身であるということ）が、たいへんな問題になる」。「人間は文化のおかげで自分自身から分離され、疎外されてしまっている。文化が現実の世界と現実の人間とのあいだに割りこんでくる」。そこで、「あらたにはだかで世界に向かいあい、ふたたび真実のなかに生きるためには、人間は、文化に反抗し、文化をふり棄て、文化から自己を解放し、文化から脱

出するしかない」。かくして「『自然への復帰』の時代、人間のなかの文化的・教養的なものに対峙する根源的・原初的なものへの復帰の時代がはじまる」のである。たとえば、ルネサンスの危機の時代や、もっと大規模にはキリストや使徒による宣教が開始された古代の危機の時代もそれであり、現代もまたそうした危機の時代である、というのがオルテガの診断である<sup>32)</sup>。

## 八 外部世界と想像力、錯誤の保存

オルテガによれば、「一般に現実世界、あるいは『外部』世界と呼ばれているものは、人間を取り巻いているむき出しで真正なる原初の現実に対して与えられた一解釈」であり、したがって「一つの観念」であり、そして「この観念は信念にまで固まっている」のである。つまり、「観念を信じるということは、それが現実であると信じること」であり、したがって、「それをたんなる観念とみなさないこと」を意味している。しかし彼の洞察するところ、「このようにして生まれた信念も、はじめのうちは厳密な意味での sensu stricto 思念もしくは観念『でしかなかった』」のであり、「そうした観念はある日、一時的に現実の世界を離れて観想に耽っていた一人の人間の想像力の所産として現われた」のである<sup>33)</sup>。

では、こうした外部世界の中で人間はいかに行為してきたのか。この問題に対するにオルテガは、「外部世界にはじめて出会ったときの人間の姿」を考察する。そこでは人間はまず、「生きるためには、人間はなにをしなければならぬ、つまり彼を取り巻くものとかかわりを持たねばならない」のである。しかし、「周囲のいっさいのものにいかに対処するかを決める」には、「そのような状況の中で何をよりどころとすべきか」、つまり、「その状況とは何であるか」をまず第一に知

る必要がある。というのは「原初の現実はその秘密を人間に親しく打ち明けてくれない」ゆえ、人間は「自分に備わる知的道具」、オルテガの主張によれば「その主要器官は想像力」だが、を働かせざるをえない。人間は「現実の一つの姿もしくは存在の仕方」を頭に描き、「現実の真の姿をあれこれと推測し、世界の全体もしくは一部を作りあげる」。こうした「想像力によって世界像を作る」点で、「人間は小説家そのもの」だと言える。オルテガに言わせれば「学問という『内部世界』」も、「人間が事物の間を歩けるようにとわれわれが三世紀半前から念入りに描いている巨大な地図」である。この学問からなる地図に依拠して、「現実が私の想像どおりであると仮定すると、現実の中で私がとるべき最善の行動は、かくかくしかじかのものでなければならぬだろう。では、その結果がうまくいくかどうかを試してみよう」と、人間は「われわれの生の成否がかかっている」行動を試み、「われわれの生の立脚地を現実と空想の間の立証不能な一致に求める」のである。オルテガによればこれはまったく「無思慮なこと」だが、「選択の許される問題でない」。なぜならば、「われわれは自らの行動を導く空想を選択し、その正否を試すことはできる」が、「空想するか否かの選択はわれわれに許されていない」からである。「人間は小説家になるように定められている」のである。「われわれの妄想が現実を射止める可能性」は「もっとも望みのないものであろう」とも、「人間が生きていくうえで頼りとする唯一の蓋然性」なのである。

オルテガに言わせれば、「数千年という歲月」をかけて「多くの錯誤」を冒しつつ人間が試行錯誤し遊泳してきた、こうした「途方もない空想の海」は、「そこに入ったが最後さんざん痛めつけられて逃げだして来なけれ

ばならない袋小路のようなもの」であった。しかしながら、彼によれば、「経験して錯誤であることがわかったような錯誤」だけが、「人類の歴史の中では画期的事件 *points de repere*」なのであり、「それだけが、真の意味で獲得され、確立されたもの」なのである。それゆえ、「今日、人びとは少なくとも、人間がかつて考えだしたさまざまな世界像は現実そのものではないことを知っている」のである。そして「歴史」こそが、「錯誤を保存しておく」「営み」なのである。「個人の生の場合」、われわれはそれを「生の経験」と呼んでいるが、「歴史の場合」には、「錯誤を犯したのは過去のある時代」であり、「われわれの時代はその経験を活かすことができる」のである<sup>34)</sup>。

かくして人間は、現実世界、外部世界、また物の世界のなかに迷い込み自己疎外の状況に陥るが、自己沈潜し観念を思考して戦略を練り再度、現実の物の外部世界に挑戦していくのである。オルテガは先に紹介した『個人と社会』で、歴史を通じて繰り返されるこうした人間と世界との出会いの軌跡を次のようにまとめている。

「1 人間は物の中で難破し、自己を失ったとを感じる。これが自己疎外である。2 人間はエネルギーな努力を傾けて、自己の内面に引きこもり、こうして物について考え、それをできるだけ支配しようとする。これが自己沈潜であり、ローマ人たちのいう観想的な生活 *vita contemplativa* であり、ギリシア人たちのいう思索的生 *heoretikós*、すなわち思索 *theoria* である。3 人間は予定計画に従って世界に働きかけるため、ふたたび世界に没入する。これが行動であり、行動的な生活であり、プラクシス *práxis* である」。

「したがって行動はそれに先立つところの観想によって律せられていないならば不可能

であり、またその反対に、自己沈潜は未来の行動を立案する以外のなにものでもないのである。

「それゆえ人間の運命は、まずもって行動である。われわれは考えるために生きるのではなく、かえってその反対に、存在し続けるために考えるのである」<sup>35)</sup>。

## 九 おわりに

以上、筆者はオルテガの提供する信念と観念という一対の概念をめぐる考察してきた。オルテガは謎に満ちた現実のなかで人間は、想像力によって観念の内部世界を構築しつつ、すでに信念となった外部世界を生きていると言うのである。オルテガの研究者レイリイが言うように、観念とは、われわれが創り出した、そして現実そのものと一致したりあるいは不一致な物事の図式的なイメージである。いずれの場合にしろ、観念はその現実に対処するとき都合のよい道具として必要である。というのは人間は現実の直接的な帰結としてではなくむしろ、世界の彼の心的な解釈に応じて行為するからである。観念が集団的になるとき、また観念が現実そのものと考えられたりあるいは誤解されたりするとき、観念は信念となるのである<sup>36)</sup>。他方、信念とは「自己沈潜」の産物として現れ、その初期の段階では単に観念であった。何かを信じることは、それについて考えをめぐらせたり気づいたりすることではない。全く逆で、何かを信じることはそれが現実そのものであるかのように行為することである。観念と信念との基本的な差異は、観念が純粹に知的で個人的な存在を所持するのに対して、信念は集団的、生命的、そして無意識的でさえある。観念は生じては消えるが、信念は社会の骨組みそのものであり集団的行為や態度の根底に横たわっている。それゆえ社会がある信念に

気づきそれを擁護したり破壊したりするようになると、その信念はいずれの場合であれ存在することを止めつつあるのである<sup>37)</sup>。

## <註、引用>

- 1) Ortega y Gasset, J.: Ideas y creencias (1940), Obras completas Tomo 5, 383-384, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、観念と信念、オルテガ著作集 8、12、白水社、1970 Shikama, R.: Ortega, filósofo de las crisis históricas, 19-21, Ediciones Facultad de Filosofía, Instituto de Filosofía, Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago, 1991 \*危機の時代における「信念の問題」について要約されている。
- 2) Ibid., 384; 同上訳書、13
- 3) Lasaga Medina, J.: José Ortega y Gasset (1883-1955) Vida y filosofía, 147-148, Editorial Biblioteca Nueva, Madrid, 2003
- 4) Op. cit., 384-385; 前掲訳書、註 1)、13-14
- 5) Ibid., 385; 同上訳書、14-15 \*オルテガによる心理学的パースペクティブへの批判が言及されている。
- 6) Ibid., 385-386; 同上訳書、16-17
- 7) Ibid., 386; 同上訳書、17
- 8) Ibid., 387; 同上訳書、19
- 9) Ortega y Gasset, J.: El hombre y la gente (1957), Obras completas Tomo 7, 93-94, Alianza Editorial, Madrid, 1983; アンセルモ・マタイス / 佐々木孝訳、個人と社会—<<人と人びと>>について—、オルテガ著作集 5、40-41、白水社、1969 長谷川高生：大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座—、144-146、白水社、1996 Ortega y Gasset, J.: “Reforma de la inteligencia” de Goethe Desde Dentro (1932), Obras Completas Tomo 4, Madrid, 1983; 池島重信訳、知性の改造、現代の課題、法政大学出版局、1968
- 10) Ibid., 94; 同上訳書、41-42
- 11) Op. cit., 387-388; 前掲訳書、註 1)、20-21
- 12) Ibid., 389; 同上訳書、24-25
- 13) Ibid., 389; 同上訳書、23-24
- 14) Ibid., 390; 同上訳書、25 \*さらにオルテガは「われわれがわれわれの考えるところに従って行動する、つまりわれわれの考えをことごとく真剣なものと考えするには、実際のところ常にある特別の努力が要求されるものである」と指摘している。そしてオルテガは、以上のことは「われわれがわれわれの考えていることを信じていないという事実や、われわれが、観念を信念であるかのように扱い、それに自己の行動を託すほど観念を信じるのはきわめて危険である、と感じとっている事実」を裏付けていると言うのである。
- 15) Ibid., 390-391; 同上訳書、26-27 \*オルテガは「デカルトから今日にいたるまでに現われた理性に関する諸説の『歴史』」だけでなく、「個々の時代における理性への信頼が実際にいかなるものであったか、また理性への信頼が生に及ぼした影響がいかなるものであったか」の問いに答えようとし、「人間が全能にして慈悲深い神が存在するとの信仰のうちにある場合」と、「これとは反対の信仰のうちにある場合」との「人間の生を構成するドラマの筋」の差異、また「十七世紀末のフランスにおいて信じられていたように一理性に現実を解明する絶対的な能力があると信じる人」と、「一八六〇年の実証主義者のように、理性は本質上、相対的認識しかもたらさないと信じる人」との「お互いの生」の差異を指摘し、「理性への信仰が最近二十年間に経験した変貌ぶり」とこれから惹起している

「今日起こっているほとんど大部分の不可解な出来事」に注目するのである。

16) Ibid., 391; 同上訳書、27-28

17) Ibid., 396; 同上訳書、37

18) Ibid., 391; 同上訳書、28

19) Ibid., 392; 同上訳書、29

20) Ibid., 392-393; 同上訳書、30-31 \*オルテガによれば「逆説ととられては困るが、われわれは懷疑を信じているとでも言わなければ、真の懷疑がどんなものであるかを説き明かすのは至難のように思える」。さらに「信念は神が存在するともしないとも信じる。したがって信念は、肯定的、『否定的』の違いはあるにしろ、とにかくわれわれを明確な現実の中に位置づけるのであって、そのためその中に身を置いているときのわれわれは、なにか安定したものの中にあると感じる」と彼は言っている。

21) Ibid., 393-394; 同上訳書、32-33

22) Ibid., 394; 同上訳書、33-34 \*オルテガの見たところ、「知性は人間が最も身近に持っている道具である。それは常に人間の手もとにある。ところが人間は平生、自分は知性を用いていないと考えている。というのは、知性を用いるのは骨の折れることだからである」。

23) Ibid., 394; 同上訳書、34 \*「正確な空想というものがある。いや、むしろ空想的なものだけが正確でありうるのだ」とオルテガは言う。

24) Ibid., 395; 同上訳書、36、35、41

25) Ibid., 397; 同上訳書、39-40 \*オルテガは「このような観念の定義が最良かつ的確な問題提起である」と考えている。というのは、「こういうふうに定義すると、観念が生の中で果たしている奇妙で、きわめて微妙な役割がいかなるものであるかという大問題を、最もよく示すことができる」か

らである。ここでの「観念」という言葉の中に「すべての観念が、つまり一般的な観念や科学上の観念や宗教上の観念や、その他あらゆる観念が含まれていることに注意して」欲しいと彼は言っている。Graham, J.T.:The Social Thought of Ortega y Gasset, A Systematic Synthesis in Post-modernism and Interdisciplinarity, 475ss, University of Missouri Press, Columbia, 2001 Ortega y Gasset, J.:Un capítulo sobre la cuestión de cómo muere una creencia (1954), Obras completas Tomo 9, 707-725, 721ss, Alianza Editorial, Madrid, 1983 \*オルテガは1954年のミュンヘンでの講演で「信念はいかにして死ぬか」という演題のもと、観念と信念について再説している。西暦3世紀前後の古代ローマ帝国の歴史的危機状況を語りつつ、信念の三つの局面、“生ける信念”、“懷疑”、“効力のない”あるいは“死んだ”信念を分類し、さらに信念が“個人の観念”から誕生する局面の、“懷疑の破壊的な力”にも言及している。

26) Ibid., 397-398; 同上訳書、39-40、41、36

27) Ibid., 399; 同上訳書、42-43 \*オルテガによれば、「われわれは、あらゆるものに対して同じような断わり書きをつけることができる」。それゆえ、「われわれがその中に生きていると考え、それに依存し、われわれのあらゆる希望や危惧の究極の根拠としている現実とは他人が考えだしたものであり、原初の真正なる現実そのものでないこと」が明らかであり、「そのような信念は人間が生きてゆく際に、自己の内部と彼の周囲に見いだすものについて考えだした解釈」にほかならないのである。したがって、「この原初の真正なる現実をありのままの真実の姿で捉えるには、それに関して流布されている現代および過去の時代のあらゆる



信念を、そこから取り除く必要がある」と言っている。(Ibid., 399; 同上訳書、43-44)

28) Ibid., 399; 同上訳書、44 \* こうした考察からオルテガは、次のような教訓を引き出している。われわれが「信念の形で受け継いでいる」「先人たちの努力のいっさい」は「われわれが生きるにあたって頼りとする資本」なのであり、「ここ数年のうちに、西欧が十八世紀以来ひたりきっている無分別から脱け出すときに認識する、重要かつきわめて基本的な事柄は、人間とはなによりもまず相続者だということ」である。そして、ほかでもなく「このことが、人間を動物から根本的に区別するもの」なのであり、「相続者であるという意識を持つことは、すなわち歴史的意識を持つこと」なのである。(Ibid., 400; 同上訳書、44)

29) Ibid., 400; 同上訳書、45 森口美都男：現実、哲学論集（二）、204、晃洋書房、1981 \* 森口美都男氏はオルテガの見解を参考にして、現実そのものを「大地たる現実」、「流体的現実」、「謎としての現実」に区別してこれを探究している。長谷川高生：現実と正しき判断に関する一試論—普遍的判断理論の構築に向けて—、125-140、姫路学院女子短期大学紀要、19、1992 \* 筆者は、1. 大地たる現実 2. 液体状の現実 3. 謎としての現実 4. 現代における現実について考察した。

30) Ibid., 400-401; 同上訳書、45-46

31) Ibid., 401; 同上訳書、46-47

32) Ortega y Gasset, J.: En torno a Galileo (1933), Obras completas Tomo 5, 79-80, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 前田敬作 / 山下謙蔵共訳、危機の本質—ガリレイをめぐる—、オルテガ著作集 4、131、白水社、1970 \* オルテガによれば、「文化は、人間が極度の不安と熱烈な献身とをもって

きびしい生の必然を実感することからうまれてくるものである。それゆえ、文化は、生の純正さの最も醇乎たる産物である。この文化が、ついには生の贋造におちいるのである。人間の真正な自我が、『教養ある』、因襲的な、『社会的』自我によって窒息せしめられる。すべての文化とすべての偉大な文化時代は、人間の『社会化』をもって幕をとじる。そして、逆に、この社会化は、人間から純正な生であるところの孤独な生をうばいとる。「人間の社会化、社会的自我による個人の吸収は、文化的発展の最終段階にあらわれるものであるが、しかし、文化以前の段階においても存在する現象である。未開人とは、個性なき社会化された人間なのである」。「人間の社会化ないし集団化」は「歴史がひとつの危機におちいるたびにつねに起こった現象」である。「それは、人間の最大の自己疎外である」。(Ibid., 78; 同上訳書、129-130) Osés Gorraiz, J.: La Sociología en Ortega y Gasset, 216-217, Editorial Anthropos, Barcelona, 1989 \* 個人的・対個人的行動と社会的行動の差異が要約されている。長谷川高生：大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座—、144 - 146、白水社、1996 Graham, J.T.: Theory of History in Ortega y Gasset, "The Dawn of Historical Reason", 88ss, 227ss, University of Missouri Press, Columbia, 1997 \* グラハムはオルテガの言う「歴史的危機」の時代変化を以下のようにまとめている。「構造的に、ある歴史的危機は一つの場合だけを見れば最初から最後まで、6つのステップで検証され提示され得る」。「1. 確立された「信念」の失敗と、「世界」と「世界観」の不統合—たとえば、中世の宗教的信念・生活様式と、アリストテレス

- プトレマイオス的な哲学的科学的伝統」。

「2. 否定的な反応：複数の“哲学”やカルト、“ライフ-スタイル”、服装・芸術・文化のスタイルにおけるような、複数の知的立場や社会的行動における一層の否定性と過激性を伴う、不均衡と不安定。

a. 懐疑、幻滅、不安、疎外、絶望（あるいは自暴自棄）、至福千年説や黙示信仰のある世界終焉への恐怖。

b. つかのまの熱狂、“自然人”タイプ、ヌーディズム、ネオ原始主義、ネオ野蛮人を伴った過激主義者やパテン師たちの、またネオ犬儒主義、アダム派、青年カルト主義、神秘主義のような非合理主義者たちの、出現」。

「3. 危機の転換点：変遷と変容の始まり—発熱と発作の通常の医学的概念—その後、“古い世界”から“新しい世界”へ変転するような、伝統的な事物の“反転”が始まる」。

「4. 肯定的な反応：新しい解決策、“発明”、あまりに複雑で使い古した事物の“単純化”への探求。

a. “新しい開示” (aletheia) として、再び“機能する”ものあるいは納得のいくものの、起こり得る発見—たとえば、デカルトの合理主義、ガリレオの“新しい科学” (物理学) やニュートンの宇宙論、新しい“メソッド”や効果的な新しい“世界観”」。

「5. 解決：新しい“信念”が確立される—特に、理性や科学への信念と、人間生活にとっては進歩的で世俗化した状況 (環境) としての“世界”」。

「6. 安定した新しい時代：この場合は、現在は“近代的”な (近代化している) ヨーロッパ文明の17世紀後半の主権国家と“古典的”なバロック文化」。

「上記の具体例はすべてヨーロッパの中世

文明と近代文明を裁断するルネサンスの危機から抽出されるけれども、古代世界から中世世界への変転からの“反転”のタイプの態度と行動もまた提示され得よう。いくつかの比較し得る“反転”が共通の世界文明における近代という時代からポストモダン時代（これが最終的にいかに呼ばれようとも）への現代の変遷においても明らかになるように、オルテガによって期待されていた」。

33) Op. cit., 402; 前掲訳書、註1)、48

34) Ibid., 404-405; 同上訳書、52-54

35) Op. cit., 88; 前掲訳書、註9)、31

36) Raley, H. C.: José Ortega y Gasset: Philosopher of European Unity, 216-217, The University of Alabama Press, Alabama, 1971

37) Ibid., 214-216 \*レイリイによれば、「『自己疎外 (alteración)』とは、真の意味付けを喪失した人間的生にかかわっている。人間は彼を囲む、彼以外の“他のもの”であるあらゆるもののそばで、そしてそれらのなかで生きている。この彼以外の『“他のもの” alter』から『自己疎外 alteración』という用語が派生する。個人的な、内面の創造性よりもむしろ、生は単に社会化された、外面的な存在になる。それは、原初的にはそうであったものから“他者化され”、品位を下げられ、落とされられている。『利他主義 altruismo』という用語は同じ意味で用いられ、同じラテン語の語源に基づいている。しかしながら“自己疎外 alteración”は異常な状態ではない、なぜなら人間は生存し続けるかぎり、彼自身以外の“他の”物事とかかわりを持たざるをえない。問題は内面的、個人的なより真実な生を見失わないことである」。他方、「『自己沈潜 (ensimismamiento)』を

オルテガは、“自分自身の内にある”という状態を意味するために使用する。それゆえ“自分自身の外にある”を意味する『自己疎外 alteración』と正反対である。そのスペイン語の動詞は『自己沈潜する (ensimismarse)』、すなわち“自分自身の内に引きこもる”である。『自己疎外 alteración』が外的で意味のない生であるなら、『自己沈潜 ensimismamiento』は生を内的で意味深い存在に導く。この内的な世界には、人間の向上のためのすべての創造性、すべての真正性、すべての好機が横たわっている。オルテガの信ずるところ、人間の進歩は内面に引きこもり、内省し、最終的にはよりよき物事を創造するこの能力に依存しているのである」。